SS

佐和島ゆら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ＳＳ

【Ｎコード】

Ｎ４４１８Ｏ

【作者名】

佐和島ゆら

【あらすじ】

ツイッターノベル、ブログで書いたＳＳシリーズです

【火葬場で骨を砕く】

火葬場で骨を砕く。白い小さな壷に押し込むために。
焼かれても死んだと実感できなかった人の骨を砕くのに、少し力が要った。骨を砕くなんて初めてだし、熱いし、慣れない長い箸でおぼつかない手つきながら骨を砕いてつまんで、壷に入れた。
でも一回やったら要領がよく分かって、私は次々と壷に入れた。頭蓋骨を箸の先をぐりぐりと押しつけて潰した。白く長い骨は四分割にして壷に入れた。周りの人間はあっけにとられた顔で私の流れ作業を見つめていた。

頭の中は冷えていた。掌と額の汗は止まらなかった。

……骨になったその人が死んだ実感は湧かない。ただその人を私は恨み、感謝し、その人がいなければ生きていけない自分を呪っていた。
届けられない気持ち、ぶつけられない言葉は、石ころになってのどに詰まっていた。もう何もかもが遅い、吐き出す事すらむなしい感情。私は思い切り箸に力を込めた。

「Ｉ　ｗａｓ　ｂｏｒｎ」

今でも呼んだら骨の人は笑って私を見てくれるのだろうか。
それとも面倒くさそうに、私の伸ばした手を払いながら渋い顔をするのだろうか。
きっと死ぬまで分からない。どこにも答えなんてない。
それなのに、思えば想うほど重いと分かっているのに、子供の私は「答え」という絶望と奇跡を、骨の人のいない世界で探している。

【花葬刑】

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
花に沈んでいくあの子。うらやましいなんて言えなかった。終われるってすばらしい。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

紅い薔薇、黄色い薔薇、白い薔薇、黒、紫の薔薇や花びらが天窓を通して舞い落ちてくる。
むせかえり、頭痛が止まらない程に濃密で豪勢な香りに包まれながら、私は網状の床に転がっていた。薔薇のツタを模した、とげ付きの鎖に両腕、両足を縛られながら。
今日は私の処刑日、だそうだ。

父がこの国の女王に逆らって一族もろとも処刑されることになった。国民が疲弊するほどの贅沢癖を咎めたそうだ。父はさっき窒息死した。母は一週間前に窒息死した。
薔薇の豪勢な香りに混じって、かすかに肉の腐る臭いがした。
豪勢な処刑台だ。何層もある網状の床の檻に薔薇をどんどんと落として窒息させていくのだ。
下からどんどんと埋まり、怯えた声、耳が痛くなるほどに悲痛な声が聞こえてきた。
少しづつ女王はいたぶって、私たちを、一族丸ごと、殺したかったのだろう。

ここはそういう設定なのだ、大義名分がきちんとある。
あはは。本当可笑しい。
これで満足かな、女王様。いえ、女王様の私。窒息する前に嗤い転げて死んでしまいそうだった。

薔薇の雨は女王様の憎悪。お父さん、お母さんと叫ぶ声
降り止まない憎悪と声は、鮮やかで奇麗で、いたいたしい。
ねぇ。私が私を殺して、どう思う？

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
生きるすばらしさを説くのなら、たくさん死んでいく私をどうか救って。薔薇に埋もれる前に、早く早く。無理だと分かっているけど。
願うのは自由でしょう。手前勝手だけどね。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

夢を見た。
気持ち悪い夢。顔は違うけど、二人の私が争っている。
奇麗なドレスを着た私は生きるために死んでよと声を上げていた。
ひとりは嗤った、ひとりは自分の胸にナイフを突き立てているのに死ねなかった。

時を刻んだ手のひら（前書き）

敬老の日、施設の利用者と家族がテーマの詩でした。

時を刻んだ手のひら

てのひらがある。
しわくちゃで白いてのひら。
しみと区別がつかないくらい青紫の小さなあざだらけのてのひら。
厚みのあって細

かな傷がついたてのひら。
節々がかたまってうまく動かせないてのひら。
それはすべて時を刻んだてのひら。

遡る、遡る。

それはかつての必ずあったこと。
時を刻んだてのひらの昔話。

泣いた息子の頭をなでた手のひらだった。
娘の衣服の乱れを直した手のひらだった。
仕事のため絶えず動かし続けた手のひらだった。
独りでいきる覚悟を決めて拳をつくったてのひらだった。
時は刻まれて、てのひらは形は変わるとともに、膨張し続けた世界
は時が刻まれて

いくごとに収縮していく。

そのてのひらの前に「あなた」はいる。
収縮した世界で、無力さを嘆くてのひらのまえに「あなた」はいる。

どうかつないでください。てのひらを。

つないで熱をかよわせてください。
その熱が「あなた」と時を刻んだてのひらのはじまりになる。
希望のはじまりになる。

鬼の幸せ（前書き）

前のような詩を書くと反動で病みます（笑）

鬼の幸せ

白い腕は青あざだらけだった。伸ばした掌は快楽の道具にされた。
蕾のように閉じた唇は眼をつぶされ、何もわからないまま父に奪われた。
誰かのために存在する命であるなら、私の命は私のものではない。
ひとがたでしかない。
ひとがたに人だと言うのなら、取り返しつかないことになる。
言わないで、言わないで、さとらせないで。
この心臓が止まるまで真実なんてつげないで。
ごめんなさい、ごめんなさい、謝るから奪わないで。

ありがとうなんて絶対に言わない。
ひとがたから解き放たれたとしても、私は人にはなれないから。
体の中は真っ黒な泥が詰まっている。
憎しみなんて湧かない。愛情なんてもっていないから。
怨みなんて湧かない。虚無であればよろこばれたのだから。
だから私は鬼なの。怒りの泥をその身に詰め込んでいる。

どうして憐れむの。どうして嗤わないの？
あなたが望んだのに。自分らしくって。
つまりは私は鬼になるしかないの。
鬼になって、人の皮を被るの。それ以外の人生を理解できないから。
私は私を汚したあいつらと似たものにしかなれない。

今ね、七夕の笹を折っているの。笹が硬くて踏みつけないとうまく
折れないの
笹と後七夕飾りや祈りが掛かれた短冊をまとめてゴミ袋に入れるの。
明日にはゴミ収集車行き、そして燃やされる。何日もかけてつくら

れた願いと希望の末路だよ。想像するだけで素敵だね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4418o/

SS

2011年10月10日15時05分発行